

瀬田貞二の幼い子の文学から

桑名 恵子

キーワード：行きて帰りし物語、三びきのやぎのがらがらどん、こすずめのぼうけん

はじめに

瀬田貞二（1916～1979）は、大正生まれの児童文学者であり、児童文学の創作・翻訳・評論に大きな功績を残した人物である。わが国の絵本や児童文学を語るとき、瀬田貞二に右に出る人物はいないといわれるほど、その名声は高い。一般的には、瀬田貞二の名前を知らない人も、「三びきのやぎのがらがらどん」の絵本は多くの人が幼いとき、保育所や幼稚園、それぞれの家庭でふれたことがあると思う。瀬田貞二はこの絵本の翻訳者である。この絵本は、北歐民話の再現であり、1965年に日本では、福音館書店から発行された。マーシャ・ブラウンの絵と瀬田貞二のリズミカルでていねいな翻訳が溶け合っており、昔話絵本のなかの傑作といえる。

絵本や児童文学を愛し、子どもにすばらしい絵本や文学を与えることを一生のライフワークにした瀬田貞二が、著書「幼い子の文学」のなかで、提言した『行きて帰りし物語』について、筆者が保育の現場で保育士として勤務していたときに接した絵本や子どもたちの反応から検証する。また、没後まとめられた絵本論についても触れる。

1 絵本はひとが最初に出あう本

瀬田貞二は、東京帝国大学で国文学を専攻し、絵本や児童文学を多くの実践や研究で極めていった。家庭を開放しての文庫を行うかたわら、児童文学の翻訳、評論、創作、大学での教鞭など、いろいろな幅広い業績を残している。

瀬田貞二子どもの本評論集として出版された「絵本論」、「幼い子の文学」をはじめ、翻訳には、「おだんごばん」、「三びきのやぎのがらがらどん」、「アンガスとあひる」、「かさじぞう」などがある。

瀬田貞二の没後1985年福音館書店から出版された「絵本論」のなかで、瀬田は「ひとの最初に出あう本、それは絵本である」と冒頭で述べている。

ひとが生まれる。三歳の幼児も小学生も、大学生も大人も、すべてのひとが最初に出あう本が絵本であると瀬田がいう。そして、最初に出あうことの意味を説いていく。

わが国では、絵本の歴史はまだ浅く、明治や大正の初めごろまでは、すぐれた絵本があまりなかった。だから、年配の方に「あなたの最初に出あった本はなんですか」と質問しても、ほとんどのひとが本名を答えられないという。多くのひとは、最初の本が国定教科書であったり、大人の小説本であったりした。¹⁾

瀬田はさらに絵本にめぐりあえなかった年配のひとは2重の不幸があるという。1つは、絵本にめぐりあえなかった幼い日々の不幸であり、もう1つは、そうした大人が、その後の長い苦しい迂回の読書経験を忘れて、子どものための絵本に無関心になっていることだとしている。²⁾

瀬田は大正生まれであるが、「最初に出あった本は、中西屋の『日本一ノ画伽』です³⁾と鮮明に覚えており、そのことを幸せであったとしている。

筆者は終戦後生まれだが、最初に出あった本をはっきりと覚えてはいない。記憶にあるのは、親指姫、白雪姫、桃太郎、一寸法師など、昔話や童話を赤色を基調とした青、黄色などはっきりした単純な色彩で子ども向けのかわいらしい絵で描き、ストーリーをコンパクトに描いたものであった。（通称アカ本）当時はまだ、絵本はそれほど普及していなかった時代である。

筆者も瀬田がいう不幸なひとの仲間になるのかもしれないが、筆者の場合、「絵本」そのものではないが、母が

聞いたラジオ番組の幼児、児童向けの話をも再現して語るという「母の話」を妹と二人で聞いた記憶は鮮明に残っている。「母の話」は今でいうと「素話」ということになる。母の話はおもしろかった。自分の知らない世界が楽しいことも悲しいこともどんどん入ってきた。特に印象に残っているのは、女の子が大切にしていた手袋をなくしてしまう「赤い手袋」の話である。短い時間であったが、母の素話は筆者にとって、ワクワク、ドキドキと心の躍る夢のひとつときであった。「赤い手袋」の話が絵本で描かれていれば、筆者の出あった最初の絵本であったといえる。

さて、時代が移り、わが国でも絵本はめざましく、発展を遂げた。今は赤ちゃん時代に出あう絵本、乳児、幼児などの子どものための絵本をはじめ、大人が楽しめる絵本も多くなった。創作絵本を筆頭に、物語絵本、科学絵本などいろいろな種類の絵本が毎年一万冊の新刊が出るといわれている。絵本の選択に一苦労するなどの声も聞かれ、昔、絵本の少なかった時代のひとが聞くとなんともぜいたくな話である。

このような推移を予想していたかどうかは図ることはできないが、瀬田は絵本論のなかで、ニュージーランドの図書館員のドロシー・ホワイトの次のような言葉を紹介している。

「絵本は、子どもが最初に出あう本です。長い読書生活を通じてひとの読む本のうちで、いちばん大切な本です。その子が絵本のなかで見つけだす楽しみの量によって、生涯本好きになるかどうかが決まるのですから。また、そのときの感銘が、大人になってそのひとの想像力をことあるごとに刺激するでしょう。だから、絵本こそ、力をつくして、もっとも美しい本にしなければなりません。画家と作家と編集者と——そしておそらく読者とが協力して、年上のひとたちの本の千倍もはなやかに魅力的にしなければなりません。彫刻や映画などと同じく、絵本は一つの美術形式なのです。また、実際、すぐれた絵本は、膝の上で聞いている子にも、声を出して読んでやる親にも、楽しい印象を刻みつけるものです……」¹⁾

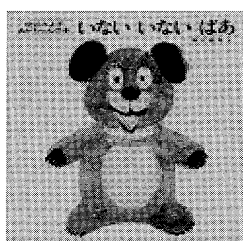
この言葉は絵本や児童文学を愛し、ひたすら子どもたちにとってすばらしい絵本や児童文学を届けることを生涯のライフワークにした瀬田が理想とする絵本の定義と受け止めることができる。瀬田はいう。「すぐれた絵本につちかわれた土壌は、のちによい鉱脈になること。すぐれた絵本で出発した道は、自由な読書の大道につながる」と。¹⁾

2 子どもに親しまれる絵本とは

第1節でひとが最初に出あう本について述べたので、次に今の時代でわが国において、選択できる絵本の種類や題名等を瀬田の絵本論から少し紹介してみよう。

① ものの認識——事物絵本

ものごころがついて、しきりに「これ、なあに？」を連発しだす2歳ごろから、絵本は親しまれるという。¹⁾ (もっとも現在では、この瀬田の定説より早い段階で絵本に出あうケースが多い。保育所での0歳児保育や保健所などの健診時にも、絵本などが利用され、赤ちゃん絵本が紹介されている。なかでも「いないいないばあ」を題材にした絵本は数多くある。赤ちゃん絵本としてシリーズで出ている松谷みよ子作の「いないいないばあ」は「いない いない ばあ にゃあにゃが ほらほら いない いない・・」と、両手で顔を隠したねこが登場。顔を隠したねこをあてっこして次のページに進む。次のページは「ばあ」と顔から手をのけると、口をあけたねこが出てきて、あーやはり、ねこだったと子どもたちは大満足。その他にもくま、ねずみ、きつねなど子どもたちがよく知っている動物が現れる。最後に人間の子どもの登場。子どもたちにとって、そこに描かれている人間の子は、自分であり、自分も絵本のなかの主人公になっている。子どもはリズムカルな言葉のくりかえしを読み



「いない いない ばあ」松谷みよ子作 瀬川康雄絵 童心社 1967年

手とともに楽しみ、「いないいない」「ばあ」の伝承あそびを再現する。おだやかな淡い色彩で描かれた水彩画がやさしさを添える。このように「いないいないばあ」の絵本は最も初歩的な絵本ではないかと考える。）

2歳ごろの事物絵本は乗り物、人形、動物などくっきりと鮮やかにかなり大きく、まぎらわしくなく描かれているものが望ましい。¹⁾

3歳ごろになると、事物の認識は細かくなるので、単純すぎるものはきられる。図鑑の先駆けのようなものが喜ばれる。¹⁾

4歳では、2、3ページごとにお話がまとまっているもの¹⁾

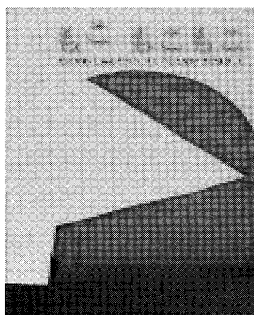
5歳では、絵本全体が1つの話の筋を追ってできているもの¹⁾

② 文字への興味——ABCの絵本

少し年齢が進むと、子どもたちは文字に興味や関心をもつ。欧米では、ABCの絵本がさかんに与えられる。日本では、「アイウエオ絵本」にあたるものである。欧米に比べると、日本ではこの種の絵本が少ない。¹⁾

③ 物語の入口——リズム絵本

3歳から4歳にかけて、筋のないお話や歌の本が好まれる。マザーグースの絵本や、わらべ歌絵本は、筋はなくても、情感の統一があり、体ごとで楽しみながら覚えることができる、物語のはいり口のような絵本である。¹⁾



「もこもこもこ」谷川俊太郎作 元永定正絵 文化出版 1977年

④ 物語絵本への準備

4歳になると簡単な物語絵本がはじまる。筋というほどのストーリーはもたないが、それなりの山場と結末をつけて楽しむものである。¹⁾

⑤ 物語絵本

4歳なかばから10歳までは、子どもたちは無限の空想をかきたててくれる物語の花園で過ごすこととなる。長短深淺、感覚的な愉快さから人生の象徴を示すものにいたる絵本に子どもは夢中で心躍らせることとなる。¹⁾ 昔話、創作童話など多種多様である。ここで、瀬田貞二が翻訳して、有名になった「三びきのやぎのがらがらどん」を紹介する。

3 三びきのやぎのがらがらどん

三びきのやぎのがらがらどんは、『ノルウェー昔話集』の1篇である。



「三びきのやぎのがらがらどん」北欧民話 マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳 福音館書店 1965年

北欧の自然を背景に描かれるこの絵本に接すると、なぜやぎの名前が「がらがらどん」なのか気になる。翻訳の瀬田貞二は、まずやぎの名前をつけることから、考えぬいたにちがいない。3びきのやぎがそれぞれ草を食べるために山に登っていくことになるが、小さいやぎが橋をわたるときは「かた こと かた こと」と音を立てる。中くらいのやぎが橋をわたるときは「がた ごと がた ごと」、最後の大きなやぎは「がたん ごとん がたん ごとん」と大きく橋を揺らせていく。この擬声語の変化とやぎの名前はなぜだかつながっているように思えてくる。やはりやぎの名前は「がらがらどん」でなくてはならなかったのであろう。すばらしい名前である。

さて、瀬田貞二は幼児童話のコツとして、絵本論のなかで、起承転結の重要性を説いている。すなわち、「はじめに状況の設定（だれがどこで何をしているということ）をくっきりしておき、事件が進行する。その過程に積み重ね法が使用され、クライマックスは積み重ねの頂上で意外な展開を見せることがねらいになる。発端と進行とクライマックスと結びが典型的にがっちりと構成された幼児童話が日本では、じつにとぼしいのは、残念である」¹⁾と述べている。そして、漸層的な物語の代表として、この「三びきのやぎのがらがらどん」をあげている。

この瀬田の論にそって、「三びきのやぎのがらがらどん」を分析してみよう。

- ① はじめにやせたやぎがいる。食べ物がなくなってしまったところに住んでいるやぎは、橋をわたり、草のはえている山へ行かなくてはならない。・・・起
- ② 橋の下には、トルロというばけものが住んでいる。・・・承
- ③ 小さいやぎも中くらいのやぎも、次に大きなやぎがくるからと言ってトルロに期待させてうまく橋を渡る。
- ④ おおきなやぎの登場 トルロに戦いを挑んでいく。固いつのでトルロを負かせてしまう。絵本では、大きなやぎの迫力、戦闘場面のダイナミックな表現に物語のクライマックスをいやがおうでも感じる。・・・転
- ⑤ やぎたちは、おいしい草をいっぱい食べてお腹いっぱいとなり、幸福に暮らす。・・・結

この展開は、簡潔で、やぎとトルロの会話だけでストーリーが淡々と進んでいく。この展開の見事さについて、瀬田貞二は、絵本論のなかで、次のように解説している。

「全体の簡潔な運びと簡潔な描写をみてください。無駄のないひとすじの話の髄、くだけしさの一点もない必要だけの効果で一気に発端、発展、クライマックス、結びの形式をつらぬいていきます」¹⁾

この瀬田貞二の説明を裏づけするのが、保育の現場で絵本を読み聞かせするときの子どもたちの反応である。この絵本を読み終えたあとの子どもたちの反応はじつにみごとである。子どもたちは、しばらく無言である。低年齢の子どものほうが早く語りだす。「トルロこわかったね。大きいやぎが勝ったね」など。

3歳児や2歳児は、物語について感想を口に出す。しかし、4、5歳児は物語に入り込んで、しばらくはぼうぜんとしている。そこで、保育士や母親はなにかを語る必要は微塵もない。子どもたちのイメージを大切にしておきたい。コメントは極力避けるようにしなければいけない。子どもたちは、今、物語の余韻にひたっている。それを感じ取れる保育士や母親でありたい。

4 絵本の絵の性質

「三びきのやぎのがらがらどん」のすばらしさは物語の展開と物語をイメージする絵が溶け合い、訳が漸進であると三拍子そろって、傑作を生んだといえる。ストーリーを進める語り手と絵がこれほどみごとに溶け合っている本は少ない。それほど絵を担当したマーシャ・ブラウンの絵はみごとである。ここで、マーシャ・ブラウンを紹介する。

マーシャ・ブラウンはアメリカの権威ある絵本賞のコールデコット賞を受賞した著名な画家である。(3回受賞、6回次点) 彼女は画家になる前に児童図書館につとめて、子どもと本との関係を経験している。瀬田貞二は絵本論のなかで、彼女の著した「絵本の特質」という文章は子どものための絵本の絵のよしあしについて、鋭い貴重な意見として紹介している。

- ① 挿絵
お話の事柄にも精神にもどれくらいふさわしいか。¹⁾
- ② 活字

読みやすく、絵ともお話の気分とも調和しているか。活字が画面と関連して魅力的に配列してあるか。¹⁾

③ 色

色は適切か、ひきつけるか、それとも水ましか、大甘か。派手でけばけばしいのであればそれがふさわしいのか。色面、線、リズムで考えてあるか。¹⁾

④ その他

劇的なおもしろさが絵のなかに組み立ててあるか、人物の性格づけはゆたかか、貧弱か。個性的な人間味をそなえているか。さまざまな人種、国民の姿、様子はかけ値なしか。ユーモアは、しんからおかしいか。¹⁾

このように、子どもに本物の感動を与えたいという切実な思いがこれほどまでの細かい配慮や厳しい姿勢を生み出した。その姿勢はもちろん実行され、彼女は現在もさらに質の高いすばらしい絵本づくりに励んでいる。

瀬田貞二とマーシャル・ブラウンの出会いにより、北欧のアスピョルセンとモーによる昔話は熱く、命燃える絵本に蘇った。日本における絵本や児童文学の礎を築き上げた瀬田貞二、アメリカにおいて、人気も実力もNO1のマーシャ・ブラウンが作りあげたこの絵本のもつ意味はあまりにも大きい。

5 行きて帰りし物語

さて、瀬田貞二は「幼い子の文学」において、幼い、いちばん年下の子どもたちが喜ぶお話の形式には、ごく単純な構造上のパターンがあるという仮説を立てている。その仮説が「行って帰る」"there and back"である。これは、トールキンの『ホビットの冒険』（1937年瀬田貞二訳岩波書店）の副タイトルとして使われている。瀬田は、「人間というものは、たいがい行って帰るもんだと思うんです。幼児体験に行って戻るといこともさまざまあるが、小さい子どもの場合は、単純に自分の体を動かして行って帰るとい動作が多い。わらべうた遊びの「花いちもんめ」は、寄って行っては帰ってくる。そういう型のものが単純な遊びのなかにずいぶんあるように思う。しょっちゅう体を動かして、行って帰ることをくり返している子どもたちにとって、その発達しようとする頭脳や感情の働きに即した、いちばん受け入れやすい形のお話は、ただ一つのところでじっとしているのではなく、とにかくなにかをする、ともだちのところへ行ったり、冒険をしたりして、帰ってくる。そういう仕組みの話を好むのは当然じゃないでしょうか」²⁾と説を進める。(筆者による省略、変更あり)

「行って帰る」にもいろいろな方式がある。

① マージョリー・フラックの絵本

『アンガスとあひる』（1930年瀬田貞二訳福音館書店）では、アンガスというスコッチテリアが、何でも知りたがる犬で、垣根の向こうにいる「ガー、ガー」とやかましい音をたてているもの（実はあひるだが、アンガスからこの時点では見えていない）を求めて、垣根をくぐって確かめに行く。はじめは、アンガスも勢いよく、あひるに負けじと「ウー、ウーワンワン！」とほえていたが、二羽のあひるは相談して、犬に攻撃をかけてくる。その迫力には、アンガスもすっかり怖気づき、目の色をかえて、さっきとは逆向きにすっ飛んで帰る。そして、元のソファの下にもぐりこむというお話である。瀬田貞二はこのお話をまさしく「行って帰る」それだけが描かれているという。ほかにはなにもなく、「行って帰る」という単純な運動になじみやすい子どもの身体的な条件ということが根底にあり、それを無理なく物語に仕上げた作品を子どもはとりわけ好むのだらうという仮説がこの絵本からはじめてうかんだという。²⁾

マージョリー・フラックの絵本には、そのほか、「まいごのアンガス」「おかあさんだいすき」など「行って帰る」構造をじつにうまく、積極的に使っている。瀬田貞二は、マージョリー・フラックの絵本が最も「行きて帰りし物語」の代表的なものだと力説している。²⁾

② マザー・グースや昔話など

しかし、「行きて帰りし物語」はマージョリー・フラックが考案したものではない。イギリス民話集などさまざまなタイプのお話がつまった昔話は、「行って帰る」構造によるものが多く、古くからこの様式は使われていたと思われる。ぐるぐる話と呼ばれたりするお話が多く、実在する物体（人、動物、ものなど）が行って帰ってくる体験を表現したものととらえられる。²⁾

「おばあさんとぶた」(ジェイコブス イギリス民話集1890年より)

「ジャックのたてた家」(マザー・ゲースのメロディの一編より)

「おだんごばん」(ロシア民話 瀬田貞二訳 福音館書店)

③ 行って帰ってくるが最後にはなくなってしまう変種の形

①、②においては、「行って帰ってくる」形式が、実際の体験に基づいたものという形になっているが、次に紹介する例は、一度行ってくるとはくるのだが、帰ってくると、全てなくなってしまうという形をとっている。

「ヘドレーのベココ」(いたずらおばけ 瀬田貞二再話 福音館書店)は、貧乏だけど陽気なおばあさんが、家に帰る途中で、金がぎっしりつまったつぼを見つけ、そのお金の使い道を想像しながら、家にひきずって帰る。そのつぼの中身が、金から、銀、鉄と変化し、最後は石ころになっている。それでも、石ころは木戸を止めるのに使おうとひきずっていくと、家についたとたん、石はへんてこな怪物になって、逃げていってしまう。でもおばあさんは、いろいろ想像したものを思い出し、満足してベッドに入るというストーリーである。この構造は、帰ってきて、何もなくなってしまうという変形になっているが、「行って帰ってくる」物語となっている。²⁾

また、ウクライナの民話の「てぶくろ」(ラチョフ絵、内田莉沙子訳 福音館書店)も同じような形をとっている。

おじいさんが犬と一緒に散歩しているときに手袋を片方、道に落としてしまう。そこへ、ねずみ、蛙、うさぎが入り、最後に熊が入る。おじいさんがその手袋をさがしにきて、手袋のなかにもそもそ動くものがあり、犬がほえるとなかにいたものはみんな逃げってしまうというお話で、保育現場では、2歳児や3歳児の劇あそびとして、よく取り上げられるお話である。これも、「行って帰る」が基調となっている。

④ 子どもの空想のなかで「行って帰る」構造の絵本

次に、主人公が実在しない空想の世界へ行き、そして、現実の世界へ帰ってくるという絵本について、瀬田貞二が著した絵本論のなかの「絵本作家の世界」8 子どもの内側と、内側の子どもと<モーリス・センダック>から紹介する。

6 モーリス・センダック 「かいじゅうたちのいるところ」から

モーリス・センダックは1928年アメリカのニューヨーク生まれであり、「かいじゅうたちのいるところ」でコールデコット賞を受賞した。独自のファンタジー世界を描いた「かいじゅうたちのいるところ」はマックスという子がオオカミの毛皮を着て、あばれ、母親に夕食抜きで、寝室へ追いやられるお話である。マックスの追いやられた寝室は、木が生え、森になり、見知らぬ土地になる。海の波もよせてきて、マックスはボートに乗り、1年もかかり、ばけものが住むところへ来る。ばけものたちはマックスをおどかさそうとするが、マックスが「だまれ」と一喝するとおとなしくなり、マックスをばけものたちの新しい王さまにする。新しい王さまの命令でばけものたちの大騒ぎが続くが、マックスはふとさびしくなって、自分を何よりもかわいがってくれる者のところへ帰りたくなる。彼は、王位をおり、船に乗って帰ってくる。そして、まだ温かい夕食をみつけるというストーリーである。¹⁾ 瀬田貞二はこの絵本について、絵本論のなかで次のように述べている。

マックスくんは私たちの身のそばのそこそこにいる男の子であり、物語は寝室から寝室へもどるまでのファンタジー、「ばけものたちのいるところ」をなかみのアンコとしますと、それが、いたずらをする出だしと夕食を与えられる結びという現実のひとつづきの時間の皮につつまれて、中心のアンコ=ファンタジーは、マックス君の内側の空想ドラマ、もしくは少年の願望や不安、フィーリング、情念というものに的確な形を与えた物語だったということになります。～略 センダックの物語は、心をのぞきこんで内側での波紋を描きだす新種だったのです¹⁾

瀬田貞二は、センダックの「かいじゅうたちのいるところ」を「行って帰る」物語には、入れていない。しかし、マックスが追いやられた自分の寝室からスタートし、その寝室にもどってくるまでの物語は、まさに瀬田が提唱した「行きて帰りし物語」の構造となっている。瀬田がこれまでに紹介した「アンガスシリーズ」や「てぶくろ」の話とは、趣を異にしているが、実体験ではない、空想の世界で遊ぶマックスの心の内側を描きながら、センダック

は現実の世界を飛び出して、想像の世界にマックスを遊ばせながら、再び帰る世界に、人として最も大切な信頼感を味わい、自己を肯定される場面を描いていた。

この作品は、多くの人が子どもの内面を描いた傑作だと評価している。彼の価値を見いだした編集者のノードストロム女史は「(この本の歴史的な意義を要約すれば) 子どもたちが強い情念をもっている点を表現した最初のアメリカ絵本だということです」¹⁾ といった瀬田貞二を紹介している。

このように「行きて帰りし物語」について、いくつかの類型をみてきた。ここで、実際に筆者が保育の現場で子どもたちに読み聞かせをした体験から、3冊の絵本をもとに瀬田貞二の提唱する「行きて帰りし物語」を検証することとする。

7 『いちごばたけのちいさなおばあさん』

絵本作家 : わたりむつこ 絵 : 中谷千代子
出版社 : 福音館書店 出版年 : 初版1983年11月1日発行
印刷/製本 : 印刷 精興社/製本 清美堂
サイズ・ページ数 : 27×20cm 32P

◇ 本のあらすじと内容あれこれ

いちご畑の土の中に、大変働きもののおばあさんが住んでいて、そのおばあさんはいちごの実がなると、赤い色をつけるのが仕事でしたとはじまるストーリーである。

ある春先のこと。急にいちご畑の葉っぱが伸び、花が咲く寸前になる。おばあさんは大慌てで、自分の仕事にとりかかる。おひさまの光を吸い込んだ水に土の中の緑の石を細かく砕いたものをまぜ、赤い液をつくり、それをいちごに塗り、色をつけなければならない。でも、水が足りない。おばあさんは、100段もある地下室におり、水を汲みにいく。次にそれをおひさまの光をたっぷりまぜ入れる。そして、また、階段をおりて、みずがめに入れていく。この場面のおばあさんの仕事をするときのいいまわしがとても気に入った。

『それから また 水をくみあげて、のぼって おりて、みずがめにぎあつ。のぼって おりてぎあつ』そして、水がようやくたまると、今度は、土の中の緑の石を細かく、細かく砕く仕事が行っている。この場面もいいまわしが詩のようで、かわいく、子どもたちも夢みる心地で聞き入っていた。『かつ、かつ、かつ、かつ。おばあさんの手は、まめだらけ。それでも、夜も昼もかつ、かつ、かつ。』歌うように、くりかえされるフレーズは子どもたちの耳に心地よい。子どもたちはすっかり、ファンタジーの世界に入ってしまう。

ようやくできあがった液を丹念に染め上げていくおばあさん。少し、冷え込んだ寒さを気にしながらもお月様がでる夜までかかって、いちごの色をつけ終えたおばあさん。うれしくて、歌を歌いだすおばあさん。そして、疲れた身体を休ませて眠りについた。あした、真っ赤にいろづきたいちごを見るのを楽しみに。しかし、なんてことだろう。次の朝おばあさんの見たもの。あたりいちめんは雪野原になっていた。おばあさんの衝撃は口では表現できない。おばあさんはとうとう泣き出してしまった。そこに通りかかったうさぎがおばあさんの足元をかきわけると真っ赤ないちごが出てきた。森の動物たちがやってきて、大喜びでいちごをほり、食べた。おばあさんのうれしかったことといったら。おばあさんは、ひとつ凍ったいちごを自分の部屋に持ち帰り、大事に大事に抱きかかえた。

<本書の魅力>

- ① 表紙がすばらしい。「エッ、いちごって、このおばあさんが赤い色をつけているの？」子どもたちの素直な疑問が飛び出るような表紙であり、ストーリーも子どもをファンタジーの世界へ連れていくものである。
- ② 作者のわたりむつこさんは、「女の一生を偶然描いた気がする」といっている。働きものの自分の祖母の一生を描いたものになったそうである。
- ③ 物語は「行きて帰りし物語」の構造になっている。
- ④ 一瞬、不安が襲う。読み手も聞き手も感情移入をして、どうしようと心配になる。
- ⑤ 絵本作家、画家にとって、生涯にわたる作品であり、画家が亡くなられた枕元においてあったそうだ。1つ

の作品は作家の全魂が入っていることを痛感した。絵本の奥の深さを改めて感じた。



「いちごばたけのちいさなおばあさん」わたりむつこ作 中谷千代子絵 福音館書店 1983年

8 『どろんこハリー』

絵本作家 : ジーン・ジオン 絵: マーガレット・ブロイ・グレアム
訳 : わたなべ しげお
出版社 : 福音館書店
出版年 : 初版1964年3月15日発行
印刷/製本 : 印刷 精興社/製本 清美堂
サイズ・ページ数 : 31×22cm 32P

本の内容あれこれ

くろいぶちのある白い犬のハリーは、なんでもすきだけれどおふろに入ることだけはだいきらい。

ある日、おふろにお湯を入れる音が聞こえてくると、ブラシをくわえてにげだして・・・

と軽妙なタッチで始めると、2歳の子どもでもくぎづけになって見入ってしまう楽しく、ゆかいな本である。

初版が1964年で40年前に世に出された作品であるが、2000年には第102刷。その間ずーとベストセラーであり、大人にも子どもにも人気が高い。40年前に子どもだったひとが大人になり、自分の子ども、孫へと3世代で楽しむケースもある。このように多くのファンをもつこの本の魅力はなにかと考えてみた。

- ① ストーリーはくりかえしが多く、わかりやすく、テンポがよい。
- ② ストーリーが瀬田貞二の提唱する「行きて帰りし物語」の形になっている。
行って、いろいろな経験を存分にし、心は解放感・満足感で満たされる。そして、帰りにつこうとするが、完全に帰りつけない。自分がハリーであるのに、家族の人にわかってもらえない。どうしよう。なぜわかってくれないの? というもどかしさ、不安、孤独が生まれてくる。
実は、この部分がこの絵本のおおきな魅力なのかもしれない。すんなり、解放感・満足感を持ったまま帰るのではなく、不安や孤独を味わったからこそ、帰ったあとの幸福感が強くなるのだと考える。
瀬田貞二が「幼い子の文学」で提唱した「行きて帰りし物語」の深みを感じ入ってしまう。
- ③ 絵は妻であるマーガレット・ブロイ・グレアムが描いているが、シンプルな文章と絵が本当にうまく結びついていて、年齢の低い子どもにもよくわかる。とくに3色刷りの淡い色づかいが強い色彩に慣れている子どもたちに新鮮さを与え、喜ばれるようである。
- ④ ハリーの表情、家族の人たちの表情がジーン・ジオンの抱く主人公像と溶け合っているので、シーンごとの主人公たちの表情をみているだけで、読者は幸せになってくる。
- ⑤ 保育所では、年齢の低い子どもたちは、ハリーがどこにいるのか捜す。どろんこになっているハリーに応援しながら、物語の展開を楽しんでいる。
- ⑥ 「行きて帰りし物語」のなかで、ようやくハリーであることに家族の人が気づいてくれた安堵感、安心感は、子ども、大人にもほっとさせる場面であり、自分の帰るところがあるということに気づかせてくれる。「め

でたし、めでたし」ではあるが、作者の意図はこのところにあるのかもしれない。

<本書の魅力>

今回絵本の持つ魅力、絵本の醍醐味をあらためて感じる事ができた。そして、1冊の絵本を完成させるために作者と絵を描く人がどのように息を合わせ、絵本を仕上げていくかその行程を想像してしまった。今まで、何度も絵本から生まれた子どもたちの笑顔や感動を目のあたりにしてきたつもりだったが、自分自身が絵本の持つ魅力を30%ぐらいしか理解していなかったのではないかと痛感した。

ジーン・ジオンの作品はうみべのハリー、ハリーのセーター、はちうえはぼくにまかせて、なつのゆきだるま、さとうねずみのケーキなど多作。



「どろんこハリー」ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレアム絵
わたなべしげお訳 福音館書店 1964年

9 『こすずめのぼうけん』

絵本作家 : ルース・エイズワース 絵: 堀内誠一
訳 : 石井桃子
出版社 : 福音館書店
出版年 : 初版1976年4月1日発行
印刷/製本 : 精興社 印刷/製本 清美堂
サイズ・ページ数: 20×27cm 32P

本の内容あれこれ

(1) お話づくりの名人 ルース・エイズワース

ルース・エイズワースはアメリカ、マンチェスター生まれで、海辺に生まれ育ったことから、海辺の生き物などのお話が多い。多くの作品を残しているが、なんといっても有名なのが『こすずめのぼうけん』と「ねこのお客」であると筆者は考える。

『こすずめのぼうけん』の絵本は、日本では、石井桃子が訳し、堀内誠一が絵を描いた。

あらすじは、ようやく羽がはえたこすずめが飛ぶことを母親から教えられ、自分の巣から飛び出していく。母親から決められていたところよりはるかに越え、どんどん高く、遠くへ力任せに飛び回る。しかし、時間が経ち、疲れ果てたこすずめは自分の巣になかなか帰れない。いろいろな鳥たちの巣にたどりつくが、仲間ではないと追い出される。さんざんな目にあつたこすずめのかわいそうなこと。しかし、とっぷりと陽が落ちた夕暮れ、こすずめを探していた親すずめに会うことができ、ようやく自分の巣にもどれたというお話である。

ストーリーの展開は分かりやすく、くりかえしをうまく取り入れ、子どもたちがお話を想像し、自分の気持ちを膨らませながら、聞き入ることができるようになっている。

筆者はこの絵本を子どもたちに読み聞かせをしたことがあったのだが、今回再度瀬田貞二の論ずる「行って帰ってくる」方式を意識して読み返してみた。

こすずめが、はじめて羽をばたつかせて、自分の力で空を飛ぶ。これが行くことのはじまりである。こすずめ

は怖いもの知らず、どんどん飛んで行ってしまふ。行って、行ってという場面である。この道中にすっかり疲れ果てて、自分の巣を探すのだが、なかなか自分の巣にはもどれない。お母さんにも会えない。カラス、はと、ふくろうなどいろいろな鳥たちの巣にたどりつくものの中に入れてはもらえない。しかし、これだけ一生懸命のこすずめを作者のエインズワースはほっておくことはできなかった。夕暮れが濃くなったとき、最後の力を振り絞って向こうからきたものに近づくこすずめ。そこにいたものこそお母さんすずめだった。こすずめは「僕はあなたの仲間でしょうか」と尋ねる。その場面はいじらしいほどだ。

絵本を子どもたちに読み聞かせをしたとき、はじめは元気に飛び回っているこすずめに応援するような見方をしているのだが、少しずつ、「どうなるの。こすずめは誰にも親切にしてもらえず、困ったな。大丈夫かな」と心配顔になってくる。それが、最後の最後でほっとできる結末が用意されており、子どもたちの表情から不安がすーと消えていく。「よかった。お母さんに会えた」と安堵する子どもたちを思い出した。

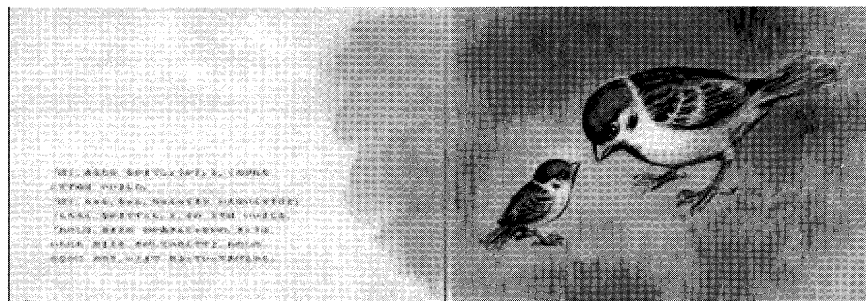
親すずめはやさしくこすずめをいたわる。そして、母親の背中に乗って、無事自分の巣に帰ってくる。母親がこすずめを背中に乗せて飛んでいる場面は、夕暮れの空を背景にして、とても印象深い。これが帰ってくる場面である。

自分の巣(家)で母親の羽にくるまれて幸せを味わうこすずめ。この経過こそが、「行って帰ってくる」構図となっている。

筆者は、この絵本を「行きて帰りし物語」を意識して読み終えたとき、あまりにも美しく、慈愛に満ちた描き方(お話、絵とも)に、思いがけず、涙があふれ、自分でも驚いてしまった。この絵本で涙が出るほど感動する自分に出会うことができたこともすばらしい体験であったといえる。

こすずめのはじめての挑戦、そしてものおじしない態度、でも、少しずつ不安になっていく姿に子どものようにわくわく、どきどきし、親すずめと出会い、母親が話した言葉に感動した。この言葉こそ、今の時代、子どもと親を結ぶ大切なことばではないかと思う。

「こすずめのぼうけん」



「こすずめのぼうけん」 ルース・エインズワース作 石井桃子訳 堀内誠一画 福音館書店 1976年



(2) 現在の親と子どもを考えてみる。

今、子どもたちの多くは自分の居場所がない。自分の家はあっても、親との生活が、その子どもが十分自己を発揮し、満足感や達成感をもてる環境であるか、また傷ついたときにほっとしたり、心身を癒す場所であるかどうかを考えてみると、答えは「ノー」が多いのではないだろうか。つまり、現在の子育て環境のなかで全ての子

どもたちが最善の利益を守られた環境にいるわけではないと考える。

親の方にもさまざまな事情や子どもを受け入れられない理由はあるだろうが、子どもが疲れたときに羽を休め、心身の回復ができるように、この親すずめのように優しい親になれるかどうかは多くの親の課題でもあるように感じる。

(3) 絵がどれもすばらしい

この本の魅力はもちろんお話の展開であると思う。どうなるのか、こすずめは助かるのか、ハラハラ、ドキドキの物語であるが、筆者は堀内氏の絵がこの物語を何倍も盛り上げていると感じた。1場面、1場面非常にいていねいに、心を込めて描かれている。木々の繊細で優しい色使いが読者を幸福にさせてくれる。よい絵本というのは、お話と絵がびたっと結びつき、ときには絵が、ときには、お話が読者を心地よい空想の世界へ連れて行ってくれるものなのだろう。

おそらく、堀内氏がこの物語を十分に読み込み、このお話のすばらしさに心から感動して絵筆を進めていったのだと推察する。

今回、瀬田貞二の提唱する「行きて帰りし物語」の代表作でもある「こすずめのぼうけん」に出会えたことは、今後の自分の仕事に役立つものである。こすずめの気持ちも理解し、親すずめのありようにも大いに学ぶものがあった。絵本からもひとは多くのことを学ぶものである。そのことも今回、身をもって体験した。

結びに

このように瀬田貞二は、人がはじめて出会う本の大切さを説き、小さい子のためのお話というのは単に、わかりやすく衛生的であればいい、なんか面白い言葉が入っていればいい、といったものでは絶対ない。それが納得され、満足されるだけの強い力がそこに内在していなければ、お話は成り立たないことが一つ一つの作品を具体的に検証していくなかからおのずと浮かびあがってくる²⁾と定義している。そして、はじめは仮説として取り上げた「行きて帰りし物語」こそが、幼い子の文学として源流であると定義づけた。

この考え方の検証を筆者なりに進めてきたが、絵本や幼い子の文学を学ぶものにとって、瀬田貞二が紹介しているいろいろな作品に触れれば触れるほどその手ごたえは強くなり、瀬田貞二の呼びかけた仮説が正論であったことを立証できたと思う。

今回の「行きて帰りし物語」についての研究を役立て、保育士養成に生かし、保育現場で、幼い子がすばらしい絵本や児童文学に出会い、心弾ませ、その伸びやかでしなやかな感性を高めていけるよう、学生への指導にあたりたいと決意している。

引用文献

- (1) 『絵本論 瀬田貞二 子どもの本評論』福音館書店 1985年
- (2) 『幼い子の文学』瀬田貞二著 中央公論社 1980年

絵本

- 『かさじぞう』瀬田貞二再話 赤羽末吉画 福音館書店 1966年
『アンガスとあひる』マージョリー・フラック作・絵 瀬田貞二訳 福音館書店 1974年
『まいごのアンガス』マージョリー・フラック作・絵 瀬田貞二訳 福音館書店 1974年
『おかあさんだいすき』（岩波のこどものほん）マージョリー・フラック作・絵 光吉夏弥訳・編 岩波書店 1954年
『おばあさんとブタ』愛蔵版おはなしのろうそく4 東京子ども図書館 2000年
『ジャックのたてた家』オーピー・コレクション “復刻マザーグースの世界” ほるぷ出版 1992年
『おだんごばん』ロシア民話 脇田和絵 瀬田貞二訳 福音館書店 1966年
『いたずらおばけ』イギリス民話 瀬田貞二再話 和田義三絵 福音館書店 1978年
『てぶくろ』ウクライナ民話 エウゲーニー・M・ラチョフ絵 内田莉紗子訳 1965年
『いない いない ばあ』松谷みよ子作 瀬川康男絵 童心社 1967年
『もこ もこもこ』谷川俊太郎作 元永定正絵 文研出版1977年
『三びきのやぎのがらがらどん』北欧民話 マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳 福音館書店 1965年
『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック作・絵 神宮輝夫訳 富山房 1975年
『いちごばたけのちいさなおばあさん』 わたりむつこ作 中谷千代子絵 福音館書店 1983年
『どろんこハリー』ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレアム絵 わたなべしげお訳 福音館書店 1964年
『うみべのハリー』ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレアム絵 わたなべしげお訳 福音館書店 1980年
『ハリーのセーター』ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレアム絵 わたなべしげお訳 福音館書店 1983年
『はちうえはぼくにまかせて』ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレアム絵 もりひさし訳 ペンギン社 1981年
『なつのゆきだるま』ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレアム絵 ふしみみさを訳 岩波書店 2003年
『さとうねずみのケーキ』ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレアム絵 わたなべしげお訳 アリス館 2006年
『こすずめのぼうけん』エインズ・ワース作 石井桃子訳 堀内誠一絵 福音館書店 1976年

参考文献

- 『おじいさんがかぶをうえました』 月刊絵本「こどものとも」50年の歩み 福音館書店 2005年
『子どもたちと絵本』長谷川摂子著 福音館書店 1988年
『えほん』こどものための500冊 日本子どもの本研究会 絵本研究部編 一声社 1989年